
MOON-4 夜叉 4 エピローグ<夜叉完結>

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 4 エピローグ<夜叉完結>

【Nコード】

N4526N

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

色々な気持ちがあつた――『光』にも『闇』にも。

MOON - 4 夜叉 4 完結です。

3・エピソード 花葬（前書き）

書きたいことは色々あったけど、何かダラダラ続くのもなんだなー、という事で400P弱となった『夜叉』。

3・エピローグ 花葬

少女は自分の流した血の海の中で、少しずつ前に向かって手を伸ばしていた。

夏の日射し上がる頃。

桜は数メートル先で倒れている榊に向かって必死に手を伸ばしていた。

それに気付いたかの様に、青年 榊も手を伸ばした。

「榊。」

少女はあどけない声で、「いつも・・・側について・・・

・・・ね。」

乱れる呼吸で囁く様に言う。

榊は手を伸ばした。

「お嬢。」

しかし・・・その互いの手が触れる事はなかった。

榊は手を力なくアスファルトに落とし、桜も手を伸ばしたまま永遠の眠りに就いた。

「桜。榊。」

秀は哀しそうな眼差しで2人を見つめた。

そして、片膝を付き、2人の手を取り重ねる。

サア・・・

一陣、風が吹いた。

そして、桜の手はあるはずのない花びらへと変わり、路上にその姿は無かった。

「・・・」

秀は桜の花びらを榊の手に握らせた。

「今度は・・・手放すなよ。お前の大切なもの。」

そつと、囁く。

夜風の中、和人と夜叉は新宿西口のカリヨン橋の上にいた。
誰も和人に気付く者はいない。

「秀、『Office To One』に戻ったよ。」

和人が言う。

夜叉は微笑んで、

「あの狼の坊やがかえ。」

「そう。明日からもう撮影だつてさ。」

和人は苦笑した。「相変わらず人をこき使つて。」

「若も変わられたの。」

彼女はそう言い、眼下に流れるタクシーの灯りの川に視線を移し、
「以前はそんな和やかな雰囲気ではなかったぞえ。」

「そう?」

和人は苦笑し、「お前にそう言われるとは思ってもみなかったよ。」

「あの人の子のおかげもあるのかもな。」

風が彼女の髪を大きく揺らす、「やはり帝王は若じゃ・・・」

・『闇』も『光』も知っている。それが『闇』と『光』を統べる真
の帝王なのかもしれぬ。」

「いつかは」

和人は、「皆離れる事になる。」

その台詞に夜叉は、

「『刹那』の時でも良いではないか。」

と、その端正な顔立ちの和人に視線を戻し、

「あの裕希の言葉を借りれば、な。」

満足気に微笑む。

「夜叉、お前は どうしたい?」

「どう、とは?」

「帝王の側近として生きるか、それともただの『闇』の者として

生きるか。」

「その答えはもう決まっている故。」

愛し気に和人を見つめる。

そして、時が止まる。

「夜叉？」

「何でもない。」

夜叉は顔を背けた。「我は少し『眠り』に就こう。若の血でかなりの齢を重ねた故。」

「すまない、夜叉。」

「謝る事はないぞえ、我が帝王。」

夜叉は、「暫くぶりに若にも会えたし、それに」

「それに？」

『永い時の中で夜叉もその人の側にいたいって想った事はないの？』

裕希の言葉が夜叉の脳裏をかすめた。

「ふふ……」

夜叉はくすくすと笑い、「あながち、捨てたものでもないのお、

『光』も『現世』も。」

今度は、和人が満足そうに微笑む。

その、『光』と『闇』とを魅了する微笑みで。

新宿の街は――まだ眠りを知らない。

裕希の叔母 市子がヨーロッパへ戻る時が来た。

出発で賑わうロビーで、

「本当に行っちゃうの？市子叔母さん。」

裕希の寂しげな問いかけに、

「もうお前は一人で大丈夫じゃ。守りたいものが出来て、それを

守る事が出来たのであろう？」

いつもの優しい微笑みの市子。

「うん！」

裕希は強く頷いた。「俺、絶対これからも守ってみせるから。」

「ならば、それで良い。私の役目は終わりじゃ。早坂殿もいるし
の。」

飛行機の出発時間が迫っている。

「その『殿』は止めてください。」

早坂は顔を赤くして言った。

もう、市子とも会う事はないだろう……

「……」

早坂は俯いた。『伝えたい気持ち』が彼にはあつた。

ココデ ノガシタラ モウ……

「あの市子さん！」

早坂は思い切って言った。「……荷物、持ちましよう
か。」

「変なの、早坂さん。」

裕希が小声で言う。

「いえ、何でもありません。」

黒いスーツ姿の早坂は照れた様に髪をかき上げた。

「荷物は自分で持つ故。」

市子は早坂を見つめ、「でないと、弱気になる。」

「は？」

市子は軽いバックだけを肩にかけ、

「では、裕希。がんばるのじゃぞ。」

そして、早坂にも、

「裕希を頼むぞえ。」

「は、はい！」

微笑み、彼らに背を向けた。

エスカレーターへ乗る直前、一度だけ市子は早坂に振り返った。

「見事であったぞ。」

と、自分の額に右手の人差指を当て、「そなたの一撃。」

「え！」

キーツ

甲高い離陸した飛行機の音が彼らの会話を遮った。

夏の空は高く澄み渡っていた。

市子を成田空港で見送った後、早坂は新宿中央警察署へ戻る途中だった。

夏の日射しがやけに暑い。

「まいったな。こりゃ、帰ったら報告書より始末書の山だ。」

ばやきながら、甲州街道沿いの歩道橋を降りた。少し歩いた所で、

るるる

ポケットの携帯が鳴った。また、事件かな、と思い、歩道の脇に避けた時、

ドンッ

誰かとぶつかってしまった。

「すみません！ちょっとぼんやりしていたもので。」

早坂はそのサラリーマン風の男性に詫び、落ちた鞆の中身を片膝を付き、拾いはじめた。

「いいですよ、気にしなくて。」

黒いスーツ姿の長身の男性が、「私も考え事してましたから。」

しゃがみこみ、早坂と一緒に書類やクリア・ファイルを拾う。

早坂はそれらを一まとめにし、

「はい、本当にすみませんね。」

差し出した相手の瞳は金色にビリジアン・ブルーを混ぜた色の瞳。

「・・・・・・」

早坂は暫し端正な顔立ちの青年を見つめたまま動作を止めてしまった。

「どうしたんですか。」

青年が尋ねる。

そこで、早坂は現実に戻り、

「あの・・・・失礼ですけど、何処かでお会いしませんでしたか？」
尋ねる。

「いえ。人違いでしょう。」

青年は静かに答えた。

（一度見たら忘れるわけないんだけどなあ。）

心の中で呟くがそれが誰か判らない。

「ありがとございました。」

青年はファイルを受け取り、鞆に入れた。

「いえ。」

早坂は笑みを浮かべて答え、「本当、すみませんでした。それじゃ。」

甲州街道沿いを再び署に向かって歩き始めた。

青年は、彼とは反対の歩道橋に向かって歩いて行く。

そして。

一度だけ振り返り、冷たい笑みを口元に浮かべた。

金色とビリジアン・ブルーを混ぜた色の瞳で早坂の背中を見つめながら。

:
A
·
B
·
S

F
i
n
B
·
G
·
M
:
▣
A
S
O
n
e
▣

3 エピソード 花葬（後書き）

ユニークの皆さま他、ご愛読ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4526n/>

MOON-4 夜叉 4 エピローグ <夜叉完結>

2010年10月8日11時20分発行